

MAN BORN TO BE KING

人間の尊厳

与えられた尊厳
失われた尊厳
回復される尊厳
そして高揚される尊厳



わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、王とし、祭司として下さった方に、世々限りなく栄光と権力とがあるように、アメン。

黙示録1章5、6節（欽定訳）

Man Born To Be King

人間の尊厳

与えられた尊厳

失われた尊厳

回復される尊厳

そして高揚される尊厳

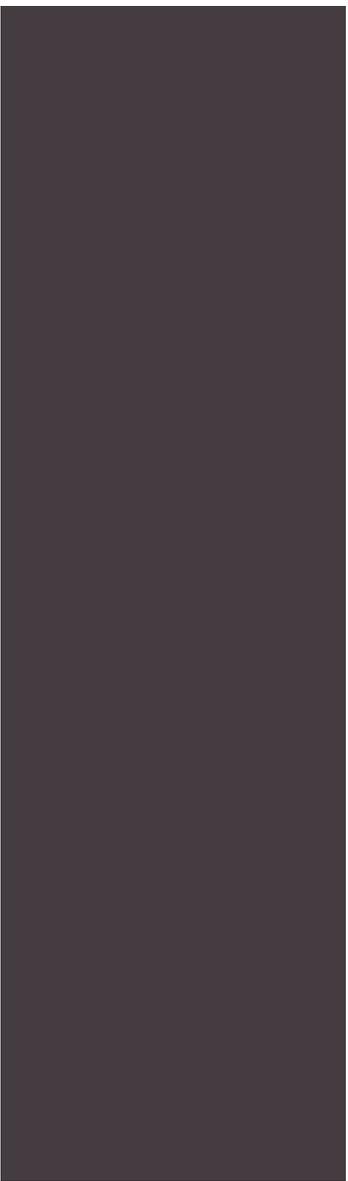
人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、

人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。

詩篇 8 篇 4 節

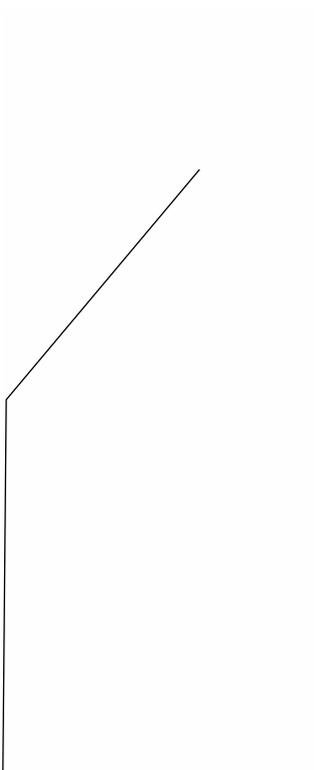
目次

第1章	初めの人間の尊厳	1
第2章	原罪＝罪性	12
第3章	女のすえ、キリスト	29
第4章	「事終わりぬ」	50
第5章	天の聖所からの流れ	63
第6章	信仰の門	79
第7章	着せられる賜物	97
第8章	死、葬り、よみがえり	107
第9章	聖書の聖化	120
第10章	神の裁きの時は来た	137
第11章	三天使の使命	161
第12章	聖徒の完成	183
第13章	最終世代	213
付録	2300日の預言	227



外庭

聖所



第1章

初めの人間の尊厳

「人間が何者だから、これを御心に留められるのだろうか。人の子が何者だから、これをかえりみられるのだろうか。あなたは、しばらくの間、彼を御使たちよりも低い者となし、栄光とほまれとを冠として彼に与え、万物をその足の下に服従させて下さった」(ヘブ2:6-8)。

1. 人間は何者か？

人間の祖先をアメーバーや類人猿とする進化論に人生の目的、意味を見出すことはむずかしい。人の命の真の価値、人間の尊厳を見出すことはできない。

人の血が水のようにたびたび流されている地上では、人間の生命は何の価値もないように思われる。しかし、天をご支配なさる神にとって、人は計り知れないほどの価値があるのである。

「神よ、あなたのもろもろのみ思いは、なんとわたしに尊いことでしょう。その全体はなんと広大なことでしょう。わたしがこれを数えようとすれば、その数は砂よりも多い。わたしが目ざめるとき、わたしはなおあなたと共にいます」(詩139:17,18)。

「人間が何者だから、これを御心に留められるのだろうか。人の子が何者だから、これをかえりみられるのだろうか」(ヘブ2:6-8)。

2. 創造主の生ける宮

人について、聖書には次のように書かれている。「わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、『わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう』（2コリ 6：16）。かつての美しい建物には、光り輝く黄金としみ一つない純潔の壁があり、シェキナーの栄光とかぐわしい香があった。そしてその建物は、一人一人の魂に開かれた高尚な運命の実物教訓であった。人間は、内住する創造主の宮となるために造られた。神は、王の王が永住なさる場所として、木、石、金、あるいは真珠などではなく、生きている人を宮とされた。

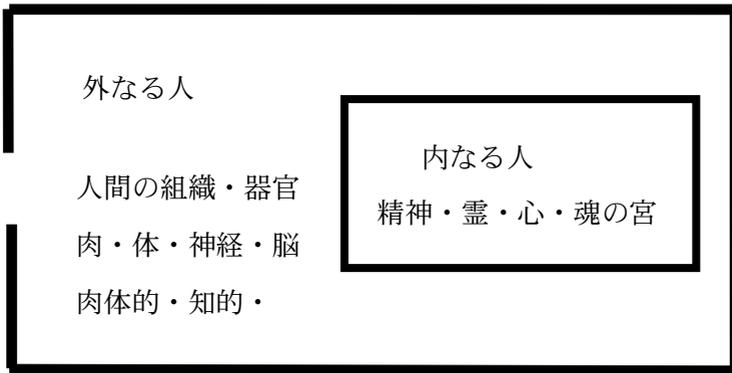
3. 神の創造の傑作

「わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは畏おそるべく、すばらしく(驚嘆すべく)造られている。あなたの御業はどんなに驚くべきものか、わたしの魂はよく知っている」(詩 139：14 欽定訳)。



聖書の中に見られる人間についての初めの宣言は次のように書かれている。「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造(ろう)』。・・・神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。「主なる神は土のちりで人を形作り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった」(創 1：26, 27/2：7 下線部は英語欽定訳)。どの被造物も神が語られることによって現れたが、人間だけは「形作」られたのである。

神は、命のない土を取って、ご自分に合わせて似たものを作られた。神は人間の組織を形作られてから、その物理的、精神的、及び道徳的な機械に「命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった」。アダムは、ちりから形作られたが、「神の子」(ルカ 3:38 英語欽定訳)、すなわちエホバの見本として写しであった。



人間の外観：

外観において、人間は自分の造り主に似ていた。彼を見るものは誰でも、神のことを考えるように導かれるはずである。彼は正しいものであり、「恐るべく、くすしく(すばらしく)」造られた(詩 139:14)。モーセの幕屋は特殊な技能を与えられた職人によって建てられたが、人間は全能者の技能によって造られたのであった。「この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない」(使徒 17:24)。「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖となえられる者がこう言われる、『わ

第1章 初めの人間の尊厳

たしは高く、聖なる所に住み、また心碎けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、碎ける者の心をいかす』(イザ 57:15)。「あなたがたは知らないのか。あなたのからだは、・・・聖霊の宮である(英語欽定訳1コリ6:19)。これらのことをはっきり理解している人は、自分の生きた組織を尊敬と敬意を持って取り扱うであろう。「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう(1コリ3:16,17)。「あなたは殺してはならない」との戒めは、「神の宮」を傷つけたり、外観をそこねたり、汚染したり、弱めたり、あるいは破壊することなどを全て禁止している。

人間の内面の美しさ：

幕屋と同じように、人間の栄光は、内に秘めた飾りにあった。聖霊は人間に霊的生命を吹き入れた。彼の心は、神の御心に似ていた。心の奥の部屋において、神はご自身の愛の律法を「心の板」にお書きになった。「神は愛である」。すなわち、神のご性質及びその律法は愛である。聖霊を通して、人間は神の罪無き性質にあずかる者であった。

律法が幕屋の奥の部屋に隠されていたように、神の律法は魂の奥の部屋に置かれ、無意識の心に隠されていた。¹

¹ 幕屋の二つの部屋は、意識している心と無意識の心の写しとして見ることが出来る。人間が隠された無意識の心を持っているということは、誰もが認めている。神だけがご存知の人間の心の内について、聖書もたびたび言及している。聖所の二つの部屋はこの事を例証している。我々がこの学びを進めるにつれて、それがますます明らかになってくるであろう。

この事は重大な意味をもっていた。人間は無意識のうちに神の御心と調和して行動し生きるのであった。無我の愛の原則が衝動と動機の隠れた源に書きつけられていた。その原則は、人間の自由を制限するものとしてではなく、心の奥の願いの自主的な表現として神に従うように導くはずであった。もちろん、意識上においても、彼は、神の愛と神との交わりに、最も純粹な喜びを見出した。聖霊の愛の火は、心の祭壇で燃え立ち、彼が感謝と賛美の香ばしい香りを自分の造り主にささげることが出来るようにした。神のみ言葉のパンと聖霊の光も、彼の心の中に置かれた。何よりも、神のご臨在の栄光は、律法が刻まれていたところの座を占めており、「宮」を栄光で満たしていた。そしてその栄光は、純潔と無垢のやわらかな光として輝き出て、人のかたちを取り巻いていたのである。

4. 人間の創造の目的

神は、この宮の創造にあたって、はっきりとした目的をお持ちであった。神は、ご自分の言葉が語られると、多くの種類の知性ある被造物が存在するようになったのだが、神の創造の統治権の最高傑作として、ご自身のみかたちに、新しい被造物を形作る必要をごらんになった。「わたしは彼らをわが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた」(イザ 43:7)。神の永遠の目的の中で、この新しく、特異な被造物は、「神の栄光のほまれのために生きるように運命づけられ、かつ定められていた」(エペ 1:12 英語改訂標準訳)。エホバの見本そして写しであったこの宮を通して、宇宙は、神のご品性の新しい啓示を持ち、「天上にあるもろもろの支配や權威が、・・・神の多種多様な知恵を知るに至る」ことになっていた(エペ 3:10)。こうし

第1章 初めの人間の尊厳

て神は、サタンの挑戦と罪に効果的に対抗し、そして宇宙に永遠の安全な基礎を据えようとされたのであった。人間は、この宮が宇宙の反逆に対抗する神の証明となるために、神の愛、憐れみ、恵みの実例を示すことになっていた。

アダムは、エデンにおいて王冠を与えられた。地上の万物は、彼の主権の下に置かれた。

「神はまた言われた、『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものごとを治めさせよう』（創1：26-28／ヘブ2：8）。彼は、「しばらくの間、・・・御使たちよりも低い者と」された（ヘブ2：7）。人間は、その構成物質において、最も貴い輝きでおおわれていた天使ルシファー（エゼ28：13を参照）の美しさや栄光は持っていなかった。幕屋の外観には、特に人目につくようなものは何もなかった。そのように、人間は最も平凡な物質である「ちり」で造られていた。それは、神が真の輝かしさは外部の華麗さにあるのではないことを知らせるためであった（あ上 p44,45,50 支配権、統治者、無制限の支配）。

しかし、人間の可能性は天使のそれよりも大きいものであった。神との交わりを通して、彼はついに神と共にその栄光のみ座につくまでに高められるのであった。主は、「貧しい者を、ちりのなかから立ちあがらせ、乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、王侯と共にすわらせ、榮譽の位を継がせられる」（サム上2：8）。永遠の昔から神のご計画は、人間と共に宇宙を共有すること、そして、神ご自身と共に人を王座の中の王座につかせることであった。人に対する神の理想は、人間の最高の思いが達することができるよりもっと高かった。人が王座につ

いて主権を得ることは、「御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定め」られていた（エペ1:5,6）。これは、「わたしたちの主キリスト・イエスにあって実現された神の永遠の目的にそうものであ」った（エペ3:11）。

「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、王とし、祭司として下さったかに、世々限りなく栄光と権力とがあるように、アメン。」（黙1:6 欽定訳、明治訳、大正訳）

預言の霊

人間は神の最高の傑作

RH6-25,1908 「人類は、神のみ像に似せて造られた。新しい異なった種類の被造物であった。人間は、神の創造の傑作で、神のかたちに造られ、神の写しになるように計画された。」

RH2-11,1902 「神は、人間をすぐれた存在者として造られた。人間だけが神のかたちに造られた。神の性質にあずかり得るものとして、また、創造者と協力して、神のご計画を実行し得るものとして造られた。」

あ上 18 「地球が、数多くの動物と植物で満たされてから、創造主のみわぎの冠であり、この美しい地球に住むのにふさわしい人間が、活動の舞台にのぼってきた。人間は、見渡すかぎりのものを統治する支配権が与えられた。『神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに…すべての…ものを治めさせよう。』神は自分のかたちに人を創造された。すなわち…男と女とに創造された』（創1:26,27）。ここに人類の起源が明瞭に述べられている。聖書の記録は、誤った結論を出す余地がないほど明白である。神はご自分のかたちに人間を創造された。そこにはあいまいさが全然ない。

第1章 初めの人間の尊厳

動物や植物などの下等な生命形態から、次第に発達の段階をたどって、人間は進化したのだと想像する余地は全くない。こうした考え方は、創造主の偉大なわざを、人間的な狭い、地上的な考え方のレベルに引き下げる。人間は、宇宙の王座から神を追い出そうと努める結果、人間の品位を低め、人間の崇高な起源を見失っている。星空を高くすえ、野の花を巧みに飾りみ力の奇跡によって、驚くべきものを天地の間に満たされたお方は、その輝かしいみわざの最後を飾るにあたって、人間をこの美しい**世界の統治者**としておたてになったが、それは生命の**賦予者**のわざに恥じないものであった。」

あ上 26 「アダムとエバは、神に忠実であるかぎり、全地を支配することになっていた。彼らは何の制約も受けずに、すべての生き物を支配することができた。」

あ上 59 「罪のために、人間だけでなく、地も悪者の支配下に陥った。そして、地も贖罪の計画によって、回復されなければならなかった。アダムは、創造されたときに、**地の統治者**としておかれた。ところが、誘惑に負けたためにサタンの支配下におかれた。『おおよそ、人は征服者の奴隷となるものである』(2ペテ2:19)。人間がサタンの捕虜になったとき、彼の**統治権**は、征服者の手に移った。こうして、サタンは『この世の神』(2コリ4:4)となった。彼は、初めアダムに与えられた**地の統治権**を彼から奪った。しかし、キリストはご自分の犠牲によって、罪の罰を払い、人間を贖うばかりでなくて、人間が失った統治権をも回復してくださるのであった。第一のアダムによって失われたものはぜんぶ、第二のアダムによって回復されるのである。預言者はこう言っている。『羊の群れのやぐら、シオンの娘の山よ、以前の主権はあなたに帰ってくる』(ミカ4:8)。」

あ上 18 - 20 「人間は、外観においても、品性においても、神のかたちを保っているはずであった。キリストだけが、天の父の『本質の真の姿』ではあるが、人間は、神に似せて造られたのである(ヘブ1:3)。彼の性質は、神のみ旨と調和していた。

人間の知力は、神の事物を理解することができた。彼の愛情は清く、食欲や情欲は理性の支配のもとにあった。彼は、神のかたちをしてい

て、神のみ旨に完全に服従していたので、清く、幸福であった。

人間が創造主によって造られたとき、彼は背が高く、完全に均整がとれていた。彼の顔は、血色がよく、生命と歓喜の光に輝いていた。アダムの身長は、今日のだれよりも、はるかに高かった。エバは、アダムよりは少し低かったが、その姿は気高く、美しかった。罪のない彼ら二人は、手で造った衣服を身にまもっていなかった。彼らは、天使が着るような光と栄光の衣をまもっていた。彼らが神に従って生活するかぎり、この光の衣は、彼らをおおっていたのである。」

ミニ 388 「創造の最高作品である人間」 人類の創造において、個性をそなえられる神の力があらわされた。神がご自分の像に似せて人を造られたとき、そのかたちはすべての点において完全であったが、生命がなかった。そこで個性をそなえておられる神が、そのかたちに生命の息を吹き入れた。そこで初めて人間は生ける、理性のある生物となった。人体のあらゆる部分が活動を開始し、心臓、動脈、静脈、舌、手足、感覚、頭脳、すべてが活動を始め、あらゆるものが法則のもとにおかれ、人間は生ける霊となった。神のみ言葉であるキリストを通じて、実在者である神が人間を創造し、知能をおさづけになられたのである。

わたしたちの肉体がかくれたところで造られたときも、わたしたちの身体は神の目には明らかであり、未完成であるその身体を神はごらんになり、生れ出る前から神の書に、わたしたちの器官は全部しるされている。

神は、創造の最高作品である人間が、すべて人間より下等なものにまさって神の思想をあらわし、その栄光を示すように望んでおられる。しかし、人間は自分を神としてはならない。」

聖所は人間の象徴

教育 28,29 「そこで神は、ご自分の住居をつくらせようとお望みになったイスラエル人に、ご自分のかがやかしい理想の品性を示された。このご品性の型は、神が、シナイ山で律法をおあたえになる際、モーセの前を通りすぎながら『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒るこ

第1章 初めの人間の尊厳

とおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神』と宣言なさったときに、かれらに示された。

しかし、彼らは、自分自身では、この理想に達する能力を持っていなかった。シナイ山においての啓示は、彼らの心に、自分自身の足りなさや無力とを深く思わせただけであった。幕屋で行なう犠牲の奉仕を通して、もう一つの教訓、すなわち罪の赦しと、救い主に従うことによって生命にいたる能力とについての教訓が、彼らに教えられなければならないなかった。

幕屋の壮麗な建物、ケルビムを織り込んだ幕を反映して、にじ色に輝く黄金の壁、常にたかれている香りのために、部屋じゅうにたちこめているかぐわしい香り、純白の衣をまとった祭司、そして、至聖所の深い神秘につつまれて、契約の箱の上方、頭を垂れて礼拝している天使の像の間に臨在する、聖なる神の栄光—こうした幕屋の象徴の目的は、キリストを通して成就されなければならないかった。

こうしたすべての象徴を通して、神は、人の魂についてどんな目的をもっておられるかということを彼らがさとするように望まれた。ずっと後に、使徒パウロによって示されたのも、これと同じ目的であった。すなわちパウロは、聖霊に感じて、こう語っている。『あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである』と。』

希上 186 「輝く聖なるセラフから人間にいたるまで、すべての被造物が創造主の内住される宮となることが、永遠の昔から神の目的であった。罪のために人類は神の宮とならなくなった。人の心は、悪のために暗くなり、けがれたものとなったので、もはや聖なる神の栄光をあらわさなくなった。しかし神のみ子の受肉によって天の神の目的は達成された。神は人類の中にお住みになり、救いの恵みを通して、人の心はふたたび神の宮となる。神はエルサレムの宮が、すべての魂にとって可能な高い運命についてのたえまないあかしとなるように計画された。しかしユダヤ人は彼らが非常な誇りをもって見ていた建物の意義を理解していなかった。彼らは自分自身をみたまの聖なる宮とし

てささげなかった。」

人間の造られた目的

ST43-7 「神ご自身の栄光のために造られたのである。」

ST4-22,1903 「我々は必要とされたから存在するようになったのである。もし我々が誤った側に、敵の側につくならば、我々の創造主の計画にそわないことになる。」

あ上 14 「神は、真理と公平にかなった方法しかお用いにならなかつた。サタンは、神がお用いになれないもの、すなわち、へつらいと欺瞞を用いることができた。彼は、神の言葉を偽りであると言い、神の統治計画を曲解して示した。そして、神が天使たちに律法を課するのは正しくないと言った。また、被造物に従順と服従を求めて、神はただ自己を高めようとしておられるのだと言った。したがって、天の住民と、すべての世界の前に、神の統治は正しく、神の律法は完全であることを示す必要があった。」

第2章

原罪＝罪性



生来の人

「われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った」(イザ 53:6)。

1. 天での墮落の悲劇

王座と主権のために創造されたこの被造物が、悪習、恐怖、そして挫折のとりことなっていることは、悲劇的な謎である。創世記の第2章において、神のみかたちに創られた人間をみることができる。顔と顔を合わせて神と交わる時、人の全存在が神の愛に対する喜びをもって応答している。その後で、突然、劇的な変化が起こる。次の章では、人が神のみ前から逃げていることや、神との交わりを嫌悪している人間の姿を見る。この時点から人類歴史は、不断の悪の流れに陥った状態になる。肉欲、大虐殺、不貞など、しかも立派な人物たちでさえ犯してし

まうこうした行為の旧約聖書の描写は、多くの人々にとって思ってもよらぬショックを与える。善のために無限の可能性を秘めている者でも、悪のために無限の可能性を秘めているように思われる。

2. サタンの主張

神のみ言葉には、サタンは罪の創始者だと示されている。彼は、神のみ前の律法の前に立っていた最も高尚な天使ルシファーであった。彼は、神に対する尊敬とその栄光を自分自身のためにむさぼった。彼は、そのゆがんだ心の中で、神は自分勝手であり、自分の利益のために自分の意志を実行しているのだと考え始めた。ルシファーは心の中で次のように決心した。「いと高き者のようになろう」（イザ 14：14）。言い換えるならば、「私は、自己否定の愛の律法に対する忠誠を捨てる。宇宙を統治するためのもっと良い律法を紹介しよう。私は、自分のために生きるのだ。そして神から自分を引き離そう。私は、自分の道を行き、自分の思いを絶対的なものにしよう。制限されない自由で自分を喜ばすのだ。それだから私は神のようになるのだ。いやそればかりではない。神を対象としている宇宙の愛情をもわがものとしよう。そうするには、自己に仕えるという私の法則の方が、自己否定という神の法則よりも優れていることを証明すればよいのだ。そうすれば、わたしの王座が『神の星の上に』高められるようになるであろう」（イザ 14：12 - 14／エゼ 28章を参照）。これが、ルシファーの確固として決然たる目的となったとき、彼は、天使の軍勢の三分の一と共に宇宙から追放された。これらの天使たちは、この「優れた」政府体制に組して協力したのであった（黙 12：4,7 - 9を参照）。もちろん、神は、

第2章 原罪＝罪性

小石を地面に投げるのと同じくらい容易に、直ちにサタンを滅ぼすこともお出来になった。しかし、二つの法則は、宇宙の前で完全に明らかにされなければならなかった。

3. サタンの標的

大胆で反抗的なサタンは、宇宙の果てまでも反逆を進める用意が出来ていた。神がエデンの園に置かれたこの新しい特異な種類の被造物こそ、これを始めるのに最適な標的であった。この被造物こそ、神がその栄光を現すため、その律法を擁護するため、神と協力してサタンの王国をくつがえすために、神が創造なさった被造物ではなかったか？彼は、どんなことをしてでも、人間の創造における神のご計画を失敗に終わらせなければならなかった。

人間は、誘惑や罪の可能性の及ばないところには置かれなかった。彼は、道徳的自由意志の持ち主であった。神が意図しておられた人間に対する偉大な計画において、神が人間を強制して協力させるのではなかった。人間に王座と主権が委ねられる前に、人間の忠誠がテストされなければならなかった。二本の神聖な木に関して、一つの小さな制限がしかれた。アダムとエバは、園の中の一つの木、すなわち善悪を知る木から取って食べてはならないと命じられたのであった。

4. 誘惑と墮落

サタンがいかに媒介を通して自分の姿を隠し、そして人間に墮落をもたらしたかについての聖書の記述は、簡潔で、包括的で、核心をついたものである。

「へびは女に言った、『園にあるどの木からも取って食べるなと、ほんとうに神が言われたのですか』。女はへびに言った、『わたしたちは園の木の實を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の實については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました』。へびは女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです』(創3:1-5)。

特に重要な点は、我々がサタンの誘惑の心理作戦に気がつくことである。まず、彼は神のご品性に対するほのめかしを語る。疑いを徐々にしみ込ませるのに最も効果的な方法は疑問を起こすことであると、彼はよく承知している。彼は事実上次のように言う。「神は自分本位なのだ。本当はあなたに関心を持っていないのだ。なぜあなたに良いものを与えることを差し控えるのか？」こうして、彼は愛の創造主に自分自身の品性の特質をまとわせる。彼は、自分のとりこを会話の中に引き入れ、次に神のみ言葉には信頼することが出来ないと付け加える。「あなたは死ぬことはないでしょう」と彼は言う。言い換えるならば、「あなたは、命のために神に頼る必要はない。あなたは、あなた自身のうちに命をもっているのだ」と。²

神の慈愛に対するこの疑惑、そして神のみ言葉に対する不信が、我々の最初の先祖を律法違反者にしたのである。不信はあらゆる罪の根である。なぜなら、「すべて信仰によらないことは、罪である」からである(ロマ14:23)。

² 多くの宗教家たちがいまだに、生来、人間は不死であるという致命的な教理で、サタンの最初の偽りをそのまま繰り返していることは、驚きである。物理的にも霊的にも、人間は神から離れては生命はない。もし神が人間から生命の息を取り除くならば、その人はちに帰る(詩146:4/104:29,30)。

信仰と愛とは、分けることができない（ガラ5：6）ように、**疑いと利己心**も分けることができない。神のご品性について思い違いをして心が暗くなる時、愛情は神に対してではなく、自分の上に置かれるようになる。今日もサタンは続けてこう言う、「それを食べると・・・あなたは神のようになるでしょう」と。すなわち、「神は利己的であり、あなたには関心ありませんよ。あなたは自分で自分のために生きなければならないのです。そうすれば、あなたは、神のようになると高尚な身分を楽しむでしょう。それだから、あなたは神を必要としないのです。なぜならあなた自身が神の座を占めるからです。神のようになるためには、あなたは自己否定の法則、また神の栄光のために生きることを拒絶しなければなりません。そして、あなたとあなた自身の栄光のために生きなければなりません」と。

5. 人間に本質的な変化が起こった

罪の性質をもっと明確にするために、日光と花の実例を用いてみよう。科学的な事実では、花はそれ自体に本来備わっている色はない。花は単に、太陽光線の中に混ぜ合わされた色の一部を反射する能力を持っているだけに過ぎない。我々がその美しい色のためにその花をすばらしいと思うとき、実際には、日光の美しさをすばらしいと思っているのである。太陽の光を当てなければ、花には全く色が無いのである。全く同様に、人間が造られたとき、彼には「義の太陽」（マラ4：2）の美しさと栄光を反映する能力が与えられていたが、彼自身には命あるいは義は、まったく無かった。彼は、ちょうどあの花のようなものではあったが、重要な違いもあった。花には、意志が無い。花は、光を反射することに抵抗する事は出来ない。しかし人間は、知的、道徳的な存在として、意志を持っていた。墮落にお

いて、人間を花にたとえると次のようになる。「私は、太陽の栄光を反射するという唯一の目的のために生きるつもりはない。私は太陽の光から自分を切り離して、自分自身の光を発光しよう。そうすれば、私の内にある太陽の光がほめられる代わりに、私自身が輝かす光の故に私がほめられるようになるだろう」。

罪とは、現実を拒否することである。人間が神から自分自身を切り離した時、彼は命と愛の根源から自分自身を切り離したのである。「愛は律法を完成するものである」(ロマ13:10)から、聖霊が愛の法則の動機で人間を満たすのでなければ、人間はただ罪を犯すばかりである。どんな業でも、神から離れ、聖霊の働きから離れているのであれば、罪深いものである。それは、光ではなく、暗黒である。神から離れているが故に、命の法則の動機が愛となることは出来ないし、また命の法則の動機は利己的なものである。こうして、人間が、神の彼に対して抱いていた栄光ある御目的から離れて、自らのためにより良い運命を見つけようと考えた時、人間の宮は利己心の法則で汚された。

サタンの王国の律法が「心の碑・・・に彫りつけられ」た(エレ17:1)。利己心が愛にとって代わった。以前はただ神の品性である善の知識しか書き付けられていなかったところに、今やサタンの品性である悪の知識も書き付けられてしまった。神の臨在の栄光は宮を去り、人間からおおいが取り去られた。彼は魂と肉体のまま裸になったのである。神のようになるどころか、サタンのかたちである品性を所有するようになった。最初、彼の創造主が近づいたとき、彼は罪意識と恐怖のあまり、神の聖なる臨在から逃げた。今や彼の性質は神に敵意を抱くようになっていた。神のみ霊の働きから切り離されたとたん、彼の内に

は、神の愛に応答出来るものは何もなかった。神の愛に対する喜びにあふれた率直な応答は、神に対する恐ろしい嫌悪感に代わっていた。

6. 罪一万人の現象

では、なぜ全人類は罪人なのであるのか？それは単に、我々が皆、誘惑者に屈してアダムの悪い前例に倣っているからであろうか？アダムが罪を犯した時、人類の性質はその源から汚染されてしまった。泉が汚染されているので、アダムの命からの下流も汚染されてしまったのである。全人類がサタンの支配権に売り渡された。アダムの後世は、生まれつき、利己主義の法則で汚染された。善悪を知る木から取って食べたことの結果は、すべての人間の経験に現れた。人間の性質には、悪への傾向がある。ダビデは次のように告白している。「わたしは不義のなかに生まれました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました」(詩 51:5)。「悪しき者は胎を出た時から、そむき去り、生れ出た時から、あやまちを犯し、偽りを語る」(詩 58:3)。イザヤも次のように告白した。「われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った」(イザ 53:6)。我々がおのおの自分の道に向かって行く性質は、実際に我々の性質という織物に織り込まれている。自分のために生きること、自分を満足させること、自分のために計画すること、そして、あらゆる方法において自分を愛することなど、これらのことは人間の性質である。この生まれつきの利己心の法則が、墮落の本質である。罪は、この内部に秘められた原則が外に現れ出ることである。犯されるすべての罪は、ただ単にこの原罪の現れなのである。

マルチン・ルターは次のように言った：

「我々は、パウロがローマ人への手紙 5 章 12 節で言っているように、罪がひとりの人アダムから生じ、彼の不服従によって全人類が罪人となって死と悪魔に支配されていることを告白しなければならない。これは原罪あるいは元罪と呼ばれている。この罪の実は、十戒で禁じられているその後の悪い行為である。すなわち、不信、偽の信仰、偶像礼拝、神を恐れなくなること、ごう慢、盲目、そして簡単に言うならば、神を知ろうとしなかったり、あるいは敬わなかったりすることなどである。更に、偽ること、神の御名によって誓うこと、祈らないこと、神に寄り頼まないこと、神の御言葉を敬わないこと、両親に不従順であること、殺人を犯すこと、不貞を働くこと、盗むこと、だますことなどである。どんな理性ある者も理解することが出来ないほど、この遺伝的な罪は非常に深く、性質を墮落させているが、聖書の啓示からこの事実を信じなければならない」。Martin Luther, Smalcald Articles, Part Three, Sec. 1, Book of Concord, Vol. 1, pp. 321 f.

ジョン・ウェスレーも次のように述べている：

「私は、なぜ我々が特に我々の性質の罪を観察するのかという理由を以下に述べたいと思う。

(1) なぜなら、すべての罪の中で、この罪は非常に広大で、そして広がりやすいからである。それは、人全体に行き渡って、すべてをだめにする。他の様々な罪は神のみかたちの一部を損なわせるにとどまるが、この罪は全体を損なわせる。その罪は、泉に投げ入れられた、かの年を経たへびの毒であり、こうして

第2章 原罪＝罪性

魂のあらゆる行動、あらゆる息を汚染している。

(2) この罪は、我々の心と生活との両方において、すべての個々の罪の原因である。「悪い思い、・・・姦淫」、そしてその他の憎むべきものは、「心の中から出て」くる。この罪は苦い泉であり、個々の情欲などはその小川に過ぎない。その小川は、内部に秘めているもののすべてでなく、ただ一部を表しているのである。

(3) この罪は事実上、あらゆる罪である。なぜならこの罪は、あらゆる罪の種であるからである。そしてそのあらゆる罪は、機会があるごとにその頭をもたげようとする。この故に、この罪は「死のからだ」[ロマ7:24を参照]と呼ばれている。「死のからだ」はそれぞれの肢体から成っている。それぞれの肢体は、「肉の罪のからだ」(コロ2:11 下線部は英語欽定訳)を構成し、そのからだは靈的に死んだ状態にある。その罪は、呪われた地によくあてはまる。その地からあらゆる種類の有毒な雑草が生じてくる。これまでに存在した最も卑劣な者の会話の中にでさえも、すべての罪は出てこなかった。しかし自分の性質の中をのぞいてみて頂きたい。そうすれば、すべての罪をあなたの性質の根源に見ることが出来るであろう。そこには、無神論、偶像礼拝、姦淫、殺人など、あらゆる不義が満ちている。ことによると、あなたにはこれらの不義のどれも、あなたの心の中に見えないかもしれない。しかし、不可解な悪の深みの中に、あなたが認識しているよりもっと悪い不義があるのである。— John Wesley, from The Works of John Wesley, Vol. IX, Zondervan, pp. 462-463.

7. 罪の性質とは何か？

非常に多くの人々が、人間の罪の性質を構成するものについて混乱している。彼らは、墮落した「卑しいからだ」（ピリ 3：21）である人体を見て、そして罪が、肉体の中で座を占めている情欲と密接に関連しているのを観察して、肉体そのものが罪の性質であるという結論を下してしまっている。しかし罪そのものは、心の中に存在しており、肉体という器を通して外に現れ出るのものである。イエスはこう言われた。「悪い思い、すなわち、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、誹りは、心の中から出てくる」（マタ 15：19）。神の愛の律法が人間の心の中の支配的な法則であった時、人の性質は罪の無いものであった。

使徒パウロは、我々の肢体を支配するこの墮落した法則のことを「別の律法」、「罪の法則」、「罪と死との法則」（ロマ 7：23／8：2）などと呼んでいる。これこそ、罪の性質の本質である。墮落した、死すべきからだは、人間全体を占有しているこの誤った法則の結果に過ぎないのである。罪は、生きた機械の調子を狂わせ、肉体的、知的、及び道徳的能力を弱めてきた。特に低い性質の動物的な性癖は、汚され、不自然なやかましい要求へと刺激されてきた。しかし、墮落そのものは人体の変化ではなく、人間の心を支配する法則の変化であった。性質が罪深いか、罪が無いかを決定するのは、この心を支配する法則である。性質の通りに、行為もなされるのである。

「肉の働き」（ガラ 5：19）は全く罪深いものである。しかしそれは、肉そのものが弱く汚されているためではない。確かに最初の罪は肉の罪であったが、その時肉そのものは最初の完全な状態のうちにあった。では、何が肉を罪深いものにしたのだろうか？神が肉のうちにおられなくなって以来、動機の法則は

第2章 原罪＝罪性

間違っただけになってしまった。それは、聖霊の働きから離れると、働きの愛の動機が無くなるからである。「肉の働き」は罪深い。なぜなら、それらの働きの創造主の代わりに肉から生じるからである。神から生じるものはすべて愛の表れであり、神と共にいない被造物から生じるものはすべて利己心の表れである。

神からの命の息が無くては肉体の性質は死んでいるように、聖霊の息が無くては霊の性質も「罪過と罪とによって死んでい」る（エペ2：1）。もし神の恵みが無ければ、人間は肉体的にも死んでしまう。キリストの贖いの祝福として、神は罪人に肉体の命をも与えておられる。それによってキリストから離れるならば、肉体的にも霊的にも命は全くないという現実を理解してくれることを願っている。

「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（1コリ2：14）。「古き人」は、霊的な真理に対して全くの盲人である。肉と血は神の国を見ることはできない（ヨハ3：3）。その人は聖書研究に何年も費やして、「常に学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することができない」（2テモ3：7）。その人は聖書をただ曲解したり誤解することしか出来ない。だからパウロは、「分派」[英語欽定訳では「異端」]は肉の働きの一つであると言っているのである（ガラ5：19,20）。生まれながらの状態にある人間は、「律法が良いものであることを承認」（ロマ7：16）し、そして多くのクリスチャンの義務を認めるかもしれないが、恵みの戸を見つけられない。

彼は霊的な目を持っていない。霊的な耳も持っていませんので、

福音を聞くことが出来ない。彼は靈的な知性も持っていないので、最も単純な真理を理解することも出来ない。神を求めることさえも出来ない（ロマ3：11）。彼は死んだ肉体のように無力である。ああ、普通の事柄においては、彼は家を建てたり、事業を経営したり、舟を進行させたり、行政官として勤めたり、コンピュータ、ジェット機、宇宙船などのすばらしい物を発明することが出来るかもしれない。そして、自分の靈的な父と共に次のように言う。「この大いなるバビロンは、わたしの大いなる力をもって建てた王城であって、わが威光を輝かすものではないか」（ダニ4：30）。肉が出来ることの中で最高のことであっても、利己心と罪とで汚染されている。

心理学でさえも、人間の性質の中の基本的な本能あるいは衝動は利己主義かつ自己表現であることを認めている。心理学は、人間はこの基本的な衝動を変えることは出来ないが、それを何か価値ある道に向けることなら出来ると我々に教えている。だからある人は成功した実業家になり、自分のお金を使って社会に利益を与えるし、また別の人は社会福祉の活動家となる。さらに別の人は非常に宗教的になり、知っている限りにおいて罪の行為を避け、その立派な意志の力を働かすことによってパウロが改心する前に自負していた表面上の「落ち度のない者」（ピリ3：6）となるだろう。その人は、苦勞して一生懸命に「クリスチャン」の奉仕をし、神と敬神の念についてすばらしい話をする。彼は、自分の敬神深さを大きく見せ付けることによって、他人だけでなく、自分自身をも欺いていることになる。そして肉の働きにあって、彼のすべての行為は、ただきらびやかな罪にしかすぎない。神の御目には、彼らの行いのうちの最善のものでも、取税人や遊女の行いと同じように罪深い。いや実際は、

第2章 原罪＝罪性

後者の種類の人々の方が、前者の種類の人々よりも直ちに自分の罪深さを告白して、福音を受け入れ、「神の国にはいる」（マタ 21：31）とイエスは指摘された。

この原罪の性質をもって生まれる「古き人」は、腐れた木のようである。この人は良い実を結ぶことが出来ない（マタ 7：18）。彼は、「はなはだしく悪に染まって」（エレ 17：9）おり、完治の見込みが立たないのである。その「古き人」は死ななければならない。

全体の結論

いくつかの結論や観察をもってこの章を要約してみよう：

1. 人間が神から独立して行動しようとする時、彼は自らを愛の源から切り離し、そして愛こそ人を罪なき性質にする動機であったが、それから切り離れたのである。利己心という動機の法則は墮落の本質である。万人の心の状態は、人を神との交わりに不適當な者にし、一つの正しい行為もすることが出来ない者になっている。

2. すべての人間は、この原罪の性質を持っている。であるから、誰も、他の罪人たち、ローマ人への手紙 1 章で述べられているような罪人たちをも裁いたり、非難したりするべきではない（ロマ 2：1 を参照）。世界のあらゆる罪は、どの人の性質の中にもある。自分が他の人間のようにでないことを神に感謝したあのパリサイ人は、現実に対して盲目である。墮落した人間性を見るとき、ジョン・ウェスレーは次のようにその墓標に記すことであろう：「ただ神の恵みによって、ジョン・ウェスレーは眠っている」と。

3. 誰も、生まれながらの心の邪悪さについての正確な観念を持っていない（エレ 17：9）。あらゆる卑劣で邪悪な行為は、どの人の内にも潜在的にある。カルバリイは、人間のはなはだしい反逆の最大の実例である。なぜなら人間は自分の創造主を捕らえて、殺してしまったからである。キリストの再臨の直前、すなわち地上から神の御霊の抑制力が取り除かれる時（黙 7：1）、別の実例が与えられるであろう。それ故、世界は前例のないような無法状態、憎悪、情欲、大虐殺、そして墮落状態などに陥るであろう。こうして、悪のぶどうは熟して、「神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込」まれるであろう（黙 14：19）。

4. 人間の性質の罪深さについては、人間の考えではほとんど無意識である。「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか」（エレ 17：9）。ルターは次のように言った：「どんな理性ある者も理解することが出来ないほど、この遺伝的な罪は非常に深く、性質を墮落させているが、聖書の啓示からこの事実を信じなければならない」と。ウェスレーも次のように観察した：「不可解な悪の深みの中に、あなたが認識しているよりももっと悪い不義がある」と。サタンの王国の律法は、神の律法が書き付けられていたところ、すなわち魂の幕屋の奥にある「心の板」に、書き付けられた。初め人間は、無意識に義をあらわしていたように、墮落した人間は、生まれながら無意識に悪をあらわすのである。

5. 罪深い性質の実は、神の律法で禁じられている悪の行為である。意識的な誤った行いは、罪悪感(罪責)で魂を汚す。罪の知識が無いところには、罪悪感(罪責)もない（ヨハ 9：41／使 17：30／レビ 4:22, 23）。

第2章 原罪＝罪性

6. 「古き人」に改心を期待することは出来ない。その人は、神を愛し神に仕えるというところに至ることが出来ない。その人は、あらゆる点において大きな改革を示し、自分の良き道德的な原則と改革の標準を自慢するかもしれない。しかしその人は、ただ罪に罪を増し加えているだけに過ぎない。木からすべての悪の実を取り除いても、それは木を変えることにはならない。木は、依然として汚染されたままである。斧がその木の根もとに置かれなければならない。

7. 人間の原罪の性質についての現実が把握されていなければ、福音は何の力も無い。人間の生まれつきの自我は改変できないほどの悪であることを知らされた人は、幸福である。その人は、パウロと共に次のように告白する：「わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている」（ロマ7：18）。このような人は、もっと深く救い主の尊さを感謝し、そして人類の贖いのために払われた神の最高の恩恵をもっと喜ぶ準備が出来ている。

預言の霊

MM 143 「人間の心の悪の醜さは理解されていない。」

讚美歌 262 「十字架のうえに われは仰ぐ、わがため悩める 神のみ子を。たえにもとうとき 神の愛よ！ 底いも知られぬ 人の罪よ！」

キ道 13 「初め、人はすぐれた能力と調和の取れた精神を与えられていました。かれはまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、きよい目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心とかわってしまいました。」

キ道 81,82 「罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げることができましたが、彼はこれに失敗し、彼の罪のために、私どもは生まれながら罪あるものとなり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、清いおきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じうる義を持ちあわせていません。」

あ上 48 「罪のない夫婦が、悪を知ることは、神のみこころではなかった。神は、彼らに善を惜しみなく与えて、悪は、さしひかえておられた。それなのに、彼らは神の命令に反して、禁じられた木の実を食べってしまった。こうして彼らは、それを一生のあいだ食べ続け、悪の知識を持つことになる。」

教育 21 「善悪を知る木の実を食べた結果は、すべての人間の経験にあらわれている。人の性質には悪への傾向、すなわち自力だけでは抵抗し得ない一つの力が働いている。」

生残 51 「彼らの得た大いなる知恵というのは罪の知識と罪悪感 (Sense of guilt) だった。」

家教 514 「両親は彼らが想像するよりももっと深刻な責任がある。子供たちが相続するのは罪という遺産である。罪が彼らを神から引き離れたのである。…最初のアダムと関係して、人は罪責 (guilt) と死の宣告以外何も受けていない。」

CT 92 「彼らは両親から品性の欠点を受け継いでいる。」

キ実 304 「品性の不完全は罪である。」

FE 277-8 「品性のあらゆる面が子供たちによって相続として受け継がれる。」

スタディバイブル(新) 207 「罪の故にアダムの子孫は生来の不服従の傾向をもって生まれてきた。」 (5BC 1128)

RH 11-29,1887 「生来の (Imbred sin) 罪との戦いがある。」

4T 496 「人の心の中には生まれつきの利己主義と腐敗があり、それは徹底的な訓練と厳しい抑制によってのみ克服されるものである。それでも長年の忍耐強い努力と熱心な抵抗が要求される。神は貧窮状態

第2章 原罪＝罪性

を経験することをゆるし、困難な立場に置かれるのは、我々の品性の欠点が現わされ荒々しさがなめらかにされるためである。」

家教 580 「生まれながらの心は、神のことや、天や、天の事物について、考えることを好まないものである。」

ML 261 「生まれながらの心はイエスにある真理に対する憎しみに満ちあふれている。」

大下 247 「生まれ変わっていない者の心には、罪を愛する思いがあり、罪を抱いてその言い訳をする傾向がある。」